第二十五号〜第三十二号まで、巻頭言なし？

第三十三号（1961年3月）

愛と憤り

　ほんとうに怒ることを知らない者は、ほんとうに愛することを知らない人である。どうでもいいことに怒るものはいない。どうでもよくないこと、是非こうして欲しいことが、そうならない場合に、人は真底憤りを覚えるものである。だから、憤りは愛の半面であると言つて過言ではない。神の愛も、夛分そのような内容を持つものであろう。神は創り給いし万物を愛し給うた。殊に御自身に似せて創られた人間をこの上なく愛された。だから、人間が神から離れて自分勝手に一人歩きをしはじめた時に、激しく憤られたのである。人類にのぞんだ夛くの飢餓と艱難と、相互の反感疑惑は、このような神の憤りの現われとしか解することは出来ない。
　しかし何といつても、神の憤りの最大なるものはイエス・キリストの十字架処刑である。最愛の子を、十字架にかけることによつて、神は自己の何であるかを人類に示し給うたのである。人間的な見方からすれば、惨酷極りない刑罰の中に、神の憤りの爆発的な怖ろしさと厳しさ、そして、それ程に人間を愛し給う事実を、キリストにつける者となつて、私たちは知るのである。(半田)

第三十四号（1961年5月）

誤魔化しても駄目である－信仰と行為－(ルカ六章)
　四三悪い実を結ぶ良い木はなく、また良い実を結ぶ悪い木もない。四四木の良し悪しはいずれもその実で知られるのである。
　四六わたしを「主よ、主よ」と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。
　四九わたしの話を聞くだけで行わない者は、土の上に土台なしで家を建てた人に似ている。大水がぶつかると、たちまち崩れてしまつて、その家のくずれ方はひどかった。(塚本口語訳)
信仰と行為との関係は、この二つの譬話で非常にはつきりしている。進行は水である。行いは実である。信仰は土台である。行為は家である。たしかに一人一人の信仰の眞偽が試されるのは、その実である行いを通してである。だからといつて神さまを甘くみてはいけない。行為として表現される前の信仰の実態をも、神さまはすべて御存知なのであるから…。(半田)

第三十五号（1961年7月）

肉親の救い

「誰でもわたしの天の父上の御心を行う者、それがわたしの兄弟、姉妹、また母である」(マタイ一二・50)

とイエスは言い給うた。たしかに信仰における兄弟姉妹ほどに親しいものはない。またそれのみが、永遠の交りを続け得ることを、私たちは経験的にも信じ得る。

では、まだ信仰を持っていない肉における親兄弟、子や親戚たちとの関係はどうなるのであろうか。殊に信仰を持たず、すでに死んでしまった父母、また親戚中から爪はじきされている放蕩無頼の若者などは、私たちと永久に死別、生別のままに放置されるのであろうか。もしそうだとすると、これは私にとつて耐え難いことである。

「実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない」(ロマ九・3)

とパウロも言つているが、そのとおりである。しかし私は信じる。信仰を与えられず、死んでしまつた私の父母も、今は死人のように日陰を歩いている若者も、神は必ず救ってくださるであろう。なぜなら、キリストはすべての人の罪の故に十字架に上り給うたのであり、神は世をさばくためでなく、すべての者を救うために独り子を世につかわされたからである。(ヨハネ三・17)

十字架によつてすべての罪は拭い去られ、罪の元凶なる死が滅ぼされてしまつた以上(ヘブル二・14)死にたる者、生きたる者の区別なく、今信じている者、信じていない者の差別もなく、神はすべての者の上にあわれみを注ぎ、栄光をあらわし給うことは疑うことはできないのである。(半田)

第三十六号（1961年10月）

歴史的な信仰

内村鑑三や植村正久は、日本人の中では最高の頭脳に属していた人々であろう。人間には優秀なものへの消し難い思慕がある。しかし私たちがこれらの人々に敬慕を禁じ得ないのは、単に頭脳が優秀だからではなく、そのような人々が、自己の知識と能力の果てに、キリスト・イエスが在し給う事実を証言している点にある。もちろN私たちもそれなりに自分のすべての知識と能力をかけて、キリストにいどみ、さからい、たたかつた後、神の子に打ち倒されたのであつた。そういう自己の新生体験が、パウロやルターやバイヤンの言葉によつて裏書されたときのよろこびはいまも忘れがたい。さらに明治、大正、昭和の三代に亘つて最高の頭脳と目された人々が、私たちと全く異ならない態度をもつて、人生の真義をキリストの中に見出している事実に眼を見はるのである。信仰体験はあくまで個人的なもので、神と自己との関係のみによつて決定される秘事である。その意味では他人との比較は無用のことに違いない。しかし人間が社会的な動物であり、歴史的な存在である以上、社会と歴史の中の自己という点も無視できない。これを思えば、過去より現代に亘つて、すぐれた魂の友を持ち得る我々は、初代の使徒たちに比べて、はるかに安易で幸な道を歩んでいるといえるのではないか。(それが大きな欠点であるかもしれないが)

第三十七号（1961年12月）

創の宗教

キリスト教に対する誤解の中で、極めて重要なものが一つある。それは、福音を道徳の基準として受けとることである。クリスチャンといえば、粋も辛いもわからないコチコチの固物(かたぶつ)のように思われ易いのも、聖書が道徳の指南書であり、牧師がその免許皆伝者のように考えられているからであろう。だからもしクリスチャンが、酒を呑み、煙草を吸ったりすると、眼を丸くして驚き、陰へ回つて、あれは偽善者だと人はいう。

もし聖書が道徳指南書の範囲を出ないのだとしたら、儒教道徳があり、仏教思想も土俗にしみわたつている日本には、余り価値を持たなかったであろう。

しかし、キリスト教は、たんに倫理道徳を強調する教えではない。むしろ道徳と正義を完全に実践しようとして、血みどろのたたかいをした者が、自分の意思と努力によつて遂に完成に達することが出来ず、無限の絶望に打ちひしがれた時に、「我に来たれ」という声に眼を覚まされる、その新生への招きにほかならない。(ロマ七章参照)

生れながらの人間は、修養と努力によつて完成に到達することは不可能である。すなわち、道徳は人間を真に救う力を持たない。しかも人間は、道徳的完全を望んでやまない存在である。

道徳律法によつて、人類の堕落を防ぎ止めることが出来ないことを知り給いし神が、最後の非常手段として一人子をつかわされた理由がこゝにある。それがイエスの十字架である。

この故にキリスト教はいわゆる道徳教ではない。強いていえば超道徳教である。もっとはつきりいえば、生れながらの人間の修養や善意の無力さを、一人一人にはつきりつきつけてみせる恐るべき剣の宗教である。十字架に胸をえぐられて、悲鳴をあげたことのないものは、キリスト教をとやかくいう資格はない。

第三十八号（1962年1月）

ただキリストと共に

矢内原忠雄先生が凱旋された。主の降誕祭の日に、天に召された先生は、神に格別愛せられた方であつたと信ずる。地上における先生の御生涯は、決して平坦なものではなかつた。内村先生がそうであつたように、矢内原先生もまた神の義と真理への愛の故に、むしろ進んで茨の道を選ばれたのではなかろうか。先生が叫ばれたこと、先生が指差されたこと、それは多く祖国の腐敗であり、堕落であり、それらの元凶である人間の罪そのものであつた。日本の使命は、物質的な繁栄にあるのではない。また利己的な平和にあるのでもない。西と東の境につて、真に両洋を生かすところの、神に導かれるの国となることではないのか。

先生の名声に比べれば、私たちの存在はまことに小さい。また真実無力でもある。しか

し先生はこのように小さき者を常に愛された。昭和二十九年六月六日大学の招きで講演された後、先生は水戸の地の兄弟のために特別に時間を割いて下さった。この集りが導火線となつて水戸グループの集会は始められた。以来七年、直接教えを受ける者も受けない者も、先生から無限に多くの賜物を与えられた。それを一言でいえば、ただキリストのみに生きることであつた。(半田)

第三十九号（1962年3月）

神を見た者

神を見た者は、いまだかつて一人もない？？胸に寄添つておられる独り子のキリストだけが、わたし達に神を示してくださつたのである。(ヨハネ一・一八、塚本訳)

神を見た者が、いまだかつてひとりもいないという事実は、老使徒ヨハネが、福音書を記した時ばかりでなく、いまもまたそうであり、今後も永久にそうであるだろう。神は肉眼をもつて見ることはできない。同様に霊の眼をもつてしても神を完全に知ることは不可能である。ただ神の独り子イエス・キリストだけが、人格的な神を示されたのである。

神が肉の眼に見えないので、多くの人は存在しないと判断し、存在しない神を信ずるのは、観念の遊戯に過ぎないと嘲笑う者もいる。だが肉の眼に見えるものだけを頼る者の空しさは、伝道の書が語り尽くして余すところがない。

反対に自己のうちなる霊的なものによつて、すべてを完全に把握できるように考える者は、自己を神の座にすえる危険をしばしば犯す。神を見たと称する者、神と語つたという者、神の業を行つたと自負する者は、このような場所に自分を置いているのである。

私たちはそのどちらにも組することはできない。わたしたちは、イエス・キリストのみが、真の神、生ける神を私たちに示されることを信ずる。神の義、神の愛のすべてが、キリストを通して私たちに与えられている。キリストなき神を私たちは考えることができない。キリストこそいのちの主である。

第四十号（1962年5月）

伝道と金(マモン)

福音のために働くものが、福音によって生活するのは当然であるとイエスは述べている(マタイ一〇・一〇)。しかしパウロは、この権利を一つも利用せず、そうされるより死ぬほうがましだと述べた。(第一コリント九・一五)

イエスの仰言ることはいかにも自然で　子が父なる神の　与え給うものを自由に用いる素直さが、犯し難い権威に裏うちされていて、議論の余地もない。パウロの場合は極めて人間的である。彼の潔癖感はその手紙の各所にあらわれているが、コリント人への手紙は殊にその度が強い。

イエスとパウロとの比較だけならこれで問題はないのだが、では我々はどうしたらよいのか、という現実問題になると、事はそう簡単ではない。福音の名によって寄附を集めること、会堂を建てこれを維持すること、慈善事業を行うこと、もう一歩進んで宣教者の生活費がどうゆうふうに組立てられているか、よく考いてみる必要があろう。

もしすべてが当然だという前提に立てば、パウロの誇りと潔癖は愚かなこととなる。たがパウロはイエスの言葉の義(ただ)しさを充分知りながら、なおかつ我も人も金(マモン)によって傷つくことを、真底憂えおそれたのではあるまいか。この辺の？？徴を底の底まで理解しないで、伝道のことなど軽々しく口にすべきではない。

第四十一号（1962年7月）

人は何によつて救われるか

「教会の外に救いなし」とカトリツクはいう。ルター・カルビンらによって、「信仰のみによる救い」を主張して来たプロテスタントは、文字どおり「信仰のみ」による「救い」を生きて来たかどうか。

「人は何によつて救われるか」信仰によってか、それとも善き行によってか、洗礼によってか、それとも霊の啓示によってか、教会によってか、それともそれ以外によってか。これは極めて古い古い問題である。聖書それ自身が、創世記よりヨハネ黙示録に至る六六巻において、この問題を追及しているといえないことはないからである。

「人は何によって救われるか」たしかにこれは古い問題である。しかし同時に、最も新しい問題である。なぜなら、一人一人のキリスト者は、この問題との対決なしに誕生しないはずであり、これを通してはじめて、正しい生存の意義と真に、生きる力を与えられるはずであるからである。

ここに二人の無名のキリスト者の手紙の交換を通して、この問題の一端にふれ得たことをよろこぶ。

この論争(？)が正しいキリスト教信仰に生きようとする多くの人々に、自分の問題として、考える機会を提供し得れば、望外の幸である。(半田)

第四十二号（1962年10月）

真の独立

唯一の神への信仰は、真の独立によつてのみ可能である。金からも、名誉からも、人間からも離れるところに真の独立がある。人間からの独立は、愛する妻子からも、尊敬する先生からも独立することである。勿論牧師からも教会からもグループからも独立することである。

たとえキリストの再来を思わせる神の如き伝道者であつても人は人である。たとえ百ヶ国語を解し、古今の史実に通じ、聖書の知識を完ぺきなまでに修得した天才であつても人

は人である。人が人である以上それは罪人にほかならない。この先生の為ならば生命も捧げよう、その言葉の一つにも違反はすまいと考える人があれば、その人は神に背を向けているのだ。もし生(なま)の身体に価値があるならば、キリストの死は無駄事である。生きている先生が絶対ならば、眼に見えぬ神は偽物である。「人の仇は、その家の者なるべし」とイエスが言われたのはこのことではなかつたか。

「君の敵は、君が生命までもと敬愛する君の先生だ」といわれたら、真蒼になつて憤り、激しく抗辯する人も多かろう。しかし真理の前には何人も争うことは出来ぬ。唯一の神を真に信じ、真に愛するためには、すべての人間と袂を別かたねばならぬ。妻子からも、先生からも、自分からも、然り、自己の生命からも袂別せねばならぬ。すべての人間を拒絶し、すべての人間から断絶し、すべての人間と敵対関係に入って、始めて何のこだわりもなく神を信じ、神を愛することができる。キリストの教え給いし唯一の神への信仰はこのような信仰ではなかつたか。

先生は弟子を突き放し、教会と牧師は信者を突き放し、それで滅びる者は滅びる者の手に委ねるべきである。その時はじめて真にキリストのみのキリスト教は日本の土に根を下ろすであろう。

人はしるしを求める。眼に見える偉大や奇蹟に頼ろうとする。しかし、キリストと、キリストの十字架と復活のほかには、真の偉大も、しるしも奇蹟もない。ましてや少しばかりの才能や人格や奇行の如きは、神のみ前に物の数ではない。

教会が、その制度と牧師中心主義をやめる必要があるように、無教会も先生という教会を捨てなければならぬ。先生は教会(エクレシヤ)の主人ではない。ただキリストと、キリストを死者の中から復活せしめ給いし唯一の神のみが、エクレシヤの主である。(半田)

第四十三号（1962年12月）

信頼と愛

行為を見て、その人を信頼するか否かを決める立場と、いきなり愛の関係に入つて、愛だけで交りを續けようとする立場の二つがある。前者がこの世の立場で、後者が信仰の立場である。

もし愛の関係を前提にしないで、何がなんでも離婚を禁止されたり、七度を七十倍するまで他人の誤を赦すように命ぜられたら、こんなに辛いことはないであろう。

キリストは、私たちが敵であつた時に、十字架にかかり給うて、神の赦しを乞うて下さつた。しかもそれはキリスト御自身の願いによるのではなく、神のみ旨によるというのである。神が始めから私たちを赦すためにキリストの十字架を計画されたということは、実に驚くべきことである。

それは人間を信頼された故にであろうか。そうではない。ただ人間を愛する故にである。信頼は愛以上のものでない事実がここにある。愛は信頼にまさるのである。信仰は単なる信頼ではない。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力のかぎりをつくして主なる神を愛する」ことである。しかしこれは神が私たちをそのように無条件で愛して下さる事実を知つて、そうするのである。私たちはそうした神の大きな愛を知る故に、「自分を

愛するように隣人を愛する」ことを至上命令として受けるのである。
キリストは私たちのために死なれたのであるが、同時にすべての人のために死なれたのである。私たちが救われたのは、ただ一足先に救われたに過ぎないのである。私たちはすでにキリストのみ業の中に入つている。だから私たちはキリストの死の足りない部分として用いられる意味を、自分の生き方の中に確認する必要がある。それは、だまされても、すかされても、おどかされても、愛の関係にのみ立つて生きることが誤りでないことを発見することである。
しかし、この世の九九%までは、愛の関係ではなく、行為の関係によつて決定されるといつてよい。米ソの対立を中心とした国際関係をはじめとして、小さくは個人間の交際に至るまで、愛ではなく、行為によつてすべてが律しられている。だが、行為の批判に始終するかぎり、人類は永遠に批判、再批判の悪循環から逃れることはできないであろう。
だから、私たちが信仰の立場に立って、愛の関係に生きようとすることは、この世的な意味で大きな冒険である。下手をすると、すつからかんされるばかりでなく、他人の為に刑務所へ入らねばならない場合も起るかも知れない。従つてこれは極めて狭い道である。辛い苦しい道である。福音はよろこびのおとずれであるといつても、それは、こうした狭い道であることを覚悟した者にとつての話であつて、この世の一般的な利益や幸福を望む者には、不愉快な、かなしみのおとずれになるかも知れない。(半田)

第四十四号（1963年2月）

信仰と知識

信仰は、知識の集積でも、結果でもない。それ自身独立の世界に属している。だから学問のあるなしに関係なしに、誰でも信仰の世界に住むことができる。
信仰は、独立の世界に属することであるが、むしろ人間生活の最も基本、基礎、深奥に、上から光が与えられるというほうが、より正しいであろう。生れながらの人間は、普通言われるところの魂とか、霊性とかは、眠つているか、もしくは閉ざされた状態にある。しかし、一度、霊性に光が与えられると人間、人生、世界などを正視し、正しく理解することが、できるようになる。この時人は、自己の歩んで来た道、歩みつつある状態が、如何に盲目的、利己的であるかを、はつきり悟るのである。
光はもちろん神の人キリスト・イエスより来る。キリストの言、行い、およびその全生涯を通して、我々の魂、霊性に、強力に、かつ改変を迫るものこそ、光であり、神の力である。
光は徐々に射してくる場合もあり、一挙に隈なく照し出す場合もある。何れが正しいというものではなく、人各々に与えられたいわゆる天与の機会と申すほかはない。
聖書を読むこと、学ぶことは、光の源泉が、この聖書の中に秘められていることを、知り、かつ信ずる故にほかならない。読むこと、学ぶことは、知識の領域に属することであるが、それを真剣に続け、生きているうちに、我々はある時、はっとするような機会にめぐりあう。それが真の覚醒への第一歩である。覚醒は、決して一度で完成するものではなく、学びつつ生きる時に、より多く、より深い覚醒が与えられる。しかもそれは、樹木の

年輪のように、年々歳々積み重ね、肥え太ってゆくことではなくて、むしろ一枚一枚はぎとられて、ついには素裸にされるまで続くのである。パウロはこの点について「いままで価値あると思ったことを、糞土のように思うようになった」と告白している。(ピリピ三・8)

この故に、聖書の学びは、必ずしも学問的素養を必要としないことが明らかである。しかし、学問的素養のあることを妨げるものでもない。学問のある者は己れの知識の位置を正確に知り、学問のない者は、学ぶことの意義と価値を明確に告知される。

こうして人は、神の前に、謙虚と勤勉を学ぶのである。

信仰は、その人の持てるものを最も完全に発揮させ、開華させる原動力となる。学問も芸術も職業も家庭生活も、すべてがより正しい意味において、有効な働きをなすものとなる。もしこれらのものが不要となり、邪魔なものと感じられるようなら、その人の信仰のどこかが狂っていると考えてよいであろう。反対に、それらのものがなければ、生きてゆけないように感ずるうちは、真の信仰からなお遠いと知るべきである。

信仰は実にまことの知識である。(半田)

第四十五号（1963年4月）

真にさばく者

キリスト教は、罪人の宗教であるという。絶対に義しき神のみまえに、明々白々に己れの罪の姿を曝されて、頭を上げることのできなくなつた者を、神がキリストの十字架の故に、これを赦される教えであるという。

もし絶対に義しき神が存在するならば、世界二十億の人間のうち、ただ一人も、我正し、と主張できるものはないであろう。

しかるに、一方ではそれ程までに罪と汚れにさいなまれた人間が、この世的には最も謹厳な道徳君子の如き生活態度をなすのは、如何なる理由によるのであろうか。しかも、ただに己れにおいて謹厳であるばかりでなく、口を開き、ものを書けば、必ずといつてよいほどこの世の道徳的腐敗堕落を批判し、慨歎するのがクリスチャンの常である。

一般世間の非クリスチャンが、クリスチャンに対して最も嫌悪を感じ、また非難するのも、自分が神になつたような顔をしているキリスト者の偽善性に対してであろう。

たしかに謹厳なるキリスト者は存在する。しかし、はたして彼らは、神に代つて非クリスチャンをさばくほどに、完全な道徳実践者になつているのであろうか。

否であろう。パウロもダンテもルターも内村鑑三も、救われた後においても、決して完全な人格、絶対善に到達していないことは明白である。

それではクリスチャンはいかなる存在なのか、何故に世をさばくことができるのか。私は思う。キリスト者とは、道徳家の別称ではなく、あくまでも道徳的完全者たらんとしてこれに破れ、神の前に膝を折った者であると…。従って、クリスチャンには、非クリスチャンをさばく権利も資格もない。ただクリスチャンは、神に押し出されて、真実にものを言うものとＳれている。だから、こうだ、こうすべきだと信ずること、あるいはこうせよと示されたことは、臆せず言えるし、言わねばならぬ義務がある。

しかし、だからといって、それがすべて神のものであるか、そのキリスト者個人のものであるかは、誰れにもわからない。それがすべてのキリスト者にとって、大きなおそれでもある。もしキリスト者にして、この大いなるおそれを持たず、徒らに他を批判し、世をさばくものがあれば、その人間は、自分自身がさばかれ、滅亡へ落ち込む最も危険な絶壁に立つていることを知るべきである。(マタイ七・1〜5)

さばきは人の為すものではない。為してはならないし、為し得るものでもない。真にさばく者は、唯一人に在し給う主なる神御自身である。人はただ、大いなるおそれをもつて、主の示すところに従い、全世界の同胞に向つて、主なる神のさばきの厳しさを告げ得るのみである。そこに、批判は真実の告知以上のものであってはならぬ理由がある。

しかもそれは、自他共に、滅亡からの救いを心から希う、真にやまれざる神による愛に出発していることが基本中の基本である。(半田)

第四十六号（1963年7月）

キリストと共に死ぬ

人がその友のために自分の命をすてること、これよりも大きな愛はない。(ヨハネ一五・13)

キリスト教は愛の宗教であるという。その愛の極致を、友のために命を捨てることだとイエスは教え給う。しかし、この言葉は誤解される危険がある。というのは、この世において「犠牲」という時、人は本来自己本位、自己中心的に生きるべきものを、無理に、我まんをして、自己を犠牲にして他人のためにつくすことは尊いのだと解され易い。出来得れば犠牲はない方がよいのであり、そういう社会を作ることが人類の理想とされている。従つてこの世においては、犠牲は奨励されるべきものではなく、あくまで消極的意味しか持たない、と云い切つて誤りないであろう。

ところが、驚くべきことに、イエスはそれと全く正反対のことを云われているのである。他人のために命を捨てることは、自分を無視した、自分にとつて辛い悲しい滅亡を意味するのではなく、他人のために死ぬことが、実は自分を生かすために必要だということ、それが真の意味で自分のために生きるものの生き方である(マタイ一〇・39)とイエスは教えられ、また実さいにそれを証(あかし)されたのが十字架の死の意味であるということができる。

他人のために命を捨てることが主体的、積極的、肯定的意味において価値があるという思想は、明らかに死と生の価値のてんとうなくして得られない結論である。キリスト教の価値観はこの意味で、この世的価値観と正反対である。みてくれの修業も、克己も、勉学も、勤勉も、それが、自己を現世において生かそうとする限りにおいて、あきらかに反キリスト的である。

キリストと共に生きるとは、弟子たちが、生前のイエスと一しよに歩んでいつたような意味において生きるのではなく、実はキリストと共に死ぬことなのである。キリスト者にとつては、いかによく生きるかが問題なのではなく、いかによく、日々キリストと共に死ぬるかにすべてがかかつているといつてよいであろう。(半田)

第四十七号（1963年11月）

なし

第四十八号（1963年11月）

なし

第四十九号（1964年2月）

地方無教会運動－について(三)

二三年前の本誌に二回にわたつて「地方無教会運動について」と題して書いたことがある。とくにその第二回分に対しては、二三の未知の人から意見をいただいたことをあとからうかがい－丁度私が外国に出張中であつたためであるが－感謝の意を深くしたのであつた。それらの人々には私からは何の返事も出すことができなかつたので大変申訳ないと考えていた。また前の稿では当時の私の頭の中でまだバク然としたままで明確なイメージとなつていなかつたこともあり、それを整理して書きたいという希望もあつた。横川鉱泉におけるピリピ書の研究などをはじめとし、近ごろの私どもの集りの歩みの中で強く感ずることもあつた。こういう意味で古いものの続きではあるが、もう一度「地方無教会運動について」と題してとり上げる必要を感じた。

無教会には一定の形式や、いわゆる教義というものがない。無教会の価値は野趣にみちた自由、溌ラツたる精神にあり、それぞれの独立と、創意独創がもつとも尊重される。こういう意味でキリスト教史上、無教会はすぐれて近代的精神のあふれたものであり、従来の教会の歴史が実現することのできなかつたものを実現する可能性と未来をはらんだものである。独立と創意が尊重されると言ったが、それは内村鑑三先生の歩みや、矢内原先生の歩みを見てもわかると思う。これらの先生は個人的な能力も大きかったには違いないが、私どもの目からすればそれ以上に、キリストのみ霊の働きが強くあって、かれらに智恵と勇気をさずけたのだという気がする。

地方無教会運動の精神も根源はここにある。独立と創意が尊重されて、本当に神さまのお役に立つということである。

内村鑑三先生は二つのJに対する愛と忠誠を生涯を貫く太い筋にした。二つのJ－イエスに対するまことと、日本に対するまことである。われわれも地方無教会運動に関係するものとして、内村先生と同じ精神が、もつと具体的な形で胸の中につき上げて来るのを感ずる。イエスに対する愛、同胞に対する愛。イエスに対するまことは同時に同胞に対するまことを要求する。われらの周囲にある多くの人々にわれらが強い責任があるということである。

われわれの周囲には田園があり、森林がある。われわれは都会の人よりもより多く大自然から神の教訓を受け取る。これは実に特権といってよかろう。われわれ一人一人はとくに非凡である必要はない。平凡であつても神の真理はわかる。むしろ平凡である方が、偉くなりたい一心の世人に肩を並べるよりも、よりよく神の真理がわかる。一人の人だけが非凡である必要もない。皆が平凡であってもよい。地方無教会運動には、必ずしも先生ができる必要がない。皆が平凡であっても、皆がイエスに対して真実で忠実であれば足りる。そうすればなすべきことはおのずからわかる。自発的にできた集会は、神のみ許しなくば、消滅することもあるまい。

昨年夏、横川鉱泉でおこなわれた集会は地方無教会運動の一つのすぐれた証しであったように思う。中央の大先生の助けをかりず、身とのグループだけで独立におこなわれた集会であった。ただ一人、東京から主にある真実な兄弟、宇野輝氏の、心にせまるお話がこれに加わった。われわれは何も、地方地方とお題目をとなえ、排他的になろうという心構えはしない。ただ平凡な地方人が、平凡なままに神の真理を学び、これを実践しようということである。それはそれぞれが、それぞれの立場においてイエスに対する愛と忠実を、自由に表白しようということである。

横川鉱泉においてはピリピ書を学んだが、これがすばらしい真理の宝庫であつた。「それぞれ達し得たところによつて歩む」精神は、平凡人が平凡にしかし真実に人生を歩む道である。それは一面から言えば、平凡の非凡であつて、本当は達人の道といえるかも知れない。聖書のすばらしさはこういうところにあるのであつて、神は平凡人を平凡なままに用いて非凡なことをさせると言えるのである。われら地方無教会人はたとえ平凡であつても、イエスにあって喜び、イエスにあっていそしむことを心掛けとすべきであろう。ピリピ書の教えのとおりに。

この真理はやがては日本の津々浦々にみちなければならない。安らぎを得ない多くの同胞のために、われらがなし得る最善のものはこの教えをおくることであろう。これは同胞を救い、日本を救う道だ。おそらく、平凡な地方人だけの問題ではなく、全日本いや、全世界の問題ともなり得るであろう。

われわれは目前の小さな失敗に失望することなく、いつも前途に望みをもつて歩こう。神がもし味方するならば、窮極の勝利はわれらにある。日本の片隅にこうして生れた地方無教会運動も驚くほど未来に富むことになろう。われわれが次の世代におくれる大きな遺産を、いまわれわれが神から頂きつつあることに深い感謝を覚える。(吉原　賢二)

第五十号（1964年5月）

馬槽(まぶね)の子(クリスマス講演)
吉原　賢二

今日ここに馬槽の子と題してイエスキリストの誕生にちなんだお話をいたします。クリスマス、クリスマスと異教国日本において今や、クリスマスの名を知らぬものはありません。東京銀座通りのクリスマスの身動きもならない人出です。農村、山村にいたるまでクリスマスの行事を知つており、なかにはクリスマス・ケーキを食べ、クリスマス・ツリー

をかざつて、インスタント・クリスチャンになる人々も続出するありさまであります。クリスマスはそういうお祭り騒ぎの対象であるようなものなのか。実はとんでもないことであります。聖書、とくにルカ伝の記事を見ますと、世界中でかつてあつた一番、静かで、清潔なクリスマスは二千年前、イエス・キリストの生れたまうたその日であつたことがわかります。イエス・キリストは宮殿の中で皆に祝福されながら、祝砲のとどろく中に生れたまいませんでした。イエスは貧しい旅の大工の子供として、満員の宿屋にことわられたあげく、小屋の片すみに、馬槽の中に生れたまうたと記されております。いそがしいばかりでその日その日を送つている世間の人々には誰にも相手にされずに、生れたまうたのであります。

貧しい旅の大工の子として世に来たこの赤ん坊の誕生が、なんでそんなにめでたいのか、馬鹿騒ぎをしようとする人には拍子抜けするような出来ごとであります。ところが、このイエス・キリストの誕生の日、－クリスマスは、クリスマスの人類史的な、内面的な意味はまことに大きいものがあります。イエスはその生れたまうたときには、少数の例外を除いてまつたく世間から無視されたのでありましたけれども、本当は、キリストの誕生、出現は、人類待望の大事件であつたのであります。御承知のようにイエス・キリストはユダヤ人の中から生れたまうたのでありますが、このユダヤ人はまぎれもない優秀民族でありまして、いじめられても、ふみつぶされても、滅びることなく今日に至つており、ユダヤ暦で今年は五千何百年かに当るそうであります。五千年というのはおそらく正確ではありませんが、三千数百年くらいは確実な考証をもつてユダヤ人の歴史をさかのぼることができます。ユダヤ人は不幸にして自分たちの民族のなかから生れたイエス・キリストを理解することができず、ローマに亡ぼされて二千年間、各国を流浪し、数限りない患難を受け、根だやしにされそうになつたことも何回となくありますが、それでも滅びませんでした。流浪したその行先の国々で、文化、経済、社会の多くの分野で第一流の人々を輩出しております。ノーベル賞を受けた超一流の物理学者としてのアインシュタインをわたしどもは忘れることはできません。ユダヤ人の天才、偉人はそのほかにも数え立てればきりがありません。その優秀民族、ユダヤ人の中からイエス・キリストが生れたまうたのは、偶然のようで偶然ではありません。さきほどキリストの誕生は人類待望の大事件であつたのだと申しましたけれども、実はユダヤ人が祖先からの言伝えのうちで、キリスト－この世の救世主－の出現を待つておりました。ただユダヤ人にそういう言伝えがあるにはありましたが、実際にイエス・キリストが現れたまうてみるとイエスのみすぼらしさに、多くのユダヤ人がつまずき、こんなキリストがあるものかと、唾を吐きかけて立ち去つたのであります。ところが神さまのなさることは不思議であります。多くのユダヤ人が軽蔑し去つた。それどころか、あげくのはてには十字架につけて殺してしまったイエス・キリストの徳と力が、年とともに世界中いたるところに広まり、東洋のはずれである日本、私どもの祖国にまでも福音は芽ばえはじめたのであります。パウロの書いたコリント人への第一の手紙を見ますと、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」という有名な言葉があります。これは神の本性がはかり知れず深く広いことを示す言葉でありまして、一見愚かなように見えることも、実は人間の浅い智恵で計り切れるようなものではなく、もしも表面的にのみ考えて、神をあなどり、神をないがしろにするならば恐ろしいことになることを暗示しております。このパウロの言葉はイエス・キリストの誕生から、十字架上の死に至るまで、うまくあてはまることでありました。ユダヤ人は軽蔑したけれどもイエス・

キリストの教えは亡びませんでした。イエスの教えは徐々に、イエス誕生以前の世界史とはまつたく違ったものを、イエス以後の世界史の中に作り出して行ったのであります。すなわち、イエスの教えは世界史の色合を変えて行ったーということはまぎれもない事実であります。御承知のように、イエスの頃には金で売つたり買つたりする奴隷の制度がありました。ギリシャ・ローマのような文明の栄えたヨーロッパ社会に、奴隷制度がありました。その恥ずべき奴隷制はいつかヨーロッパから消え去りました。植民地アメリカには、白人に仕える黒人の奴隷がありました。その恥ずべき奴隷制度も、リンカーンのもとに鉄槌を下されました。新約聖書のごくごく小さな一書である「ピレモンへの手紙」にパウロが書き記したことの精神的な内容は徐々に徐々に歴史を変えてゆきました。パウロは「ピレモンへの手紙」の中で、ピレモンの奴隷であつたオネシモを、もはや奴隷としてではなく、奴隷以上のもの、愛する兄弟として扱うように要請したのですが、このパウロの祈りと願いは、それが真実なものであつたために決して滅びませんでした。これは奴隷制度についての一例でありますが、他の事がら、たとえば一夫一婦の制度とか、また人格の自由と尊厳の概念とかについても、同様なことが言えると思います。要するに十字架の上に死にたまうたイエスの教えが、世界の歴史を、内側からきよめて行つたということであります。さきに申しましたが、イエスの誕生、出現は人類待望の大事件であつたということの意味はこういうところにあるということができます。

さてここでルカ伝のイエス誕生の記事を読み、二千年前のその夜を想つてみることにします。(ルカ伝二章八節から二十節まで)

「さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群の番をしていた。すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照らしたので、彼等は非常に恐れた。御使は言つた、「恐れるな、見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きようダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになつた。このかたこそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまつて飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである。するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒になつて神をさんびして言った、「いと高きところでは神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように。」

御使たちが彼らを離れて天に帰つたとき、羊飼たちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と互に語り合つた。そして急いで行つて、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。彼らに会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を人々に伝えた。人々はみな羊飼たちが話してくれたことを聞いて、不思議に思った。しかし、マリヤはこれらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた。羊飼たちは見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。」

これはユダヤの小さな町ベツレヘムの最初のクリスマスの情景であります。耳にたこができるほど、この話は何度も聞いたと、おつしやる方もあるいはあるかも知れません。しかしこの話は何度聞いても味わいのあるものであります。内村鑑三先生は「ベツレヘムの夕」と題して「所感十年」という本の中でイエス・キリストの誕生についてこう述べておられます。「ベツレヘムの夕は千九百年前のことなりき、しかも活けるキリストは今なお我らの心に生れ給う」私の家に三ヶ月足らずの赤ん坊がおり、私は夜赤ん坊の傍で今日の

話をどうしたらよいかと考えました。お乳がみち足りて眠つているときの赤ん坊は平和そのもののような顔付です。貧しい夫婦のあいだに生れたイエスの赤ん坊時代もこのような平和が充ちていたのだろうかと考えさせられました。

私どもはイエスの誕生の話から、つぎのような大事な点を学ばされます。第一に、イエス・キリストの誕生はすべての民の救いのために人類に与えられたということ。第二にイエス・キリストを通して、本当の平和が人類にやつてくるということであります。

すべての民の救い、万民の救いということはイエスの誕生の意義のもつとも大事な点であろうと思います。キリストの前には老いも若きも、男も女も、白人も黒人も差別なく、富めるも貧しきも、地位高きも低きも、賢きも愚かも区別がありません。すべての人がひとしく、イエス・キリストを主と仰ぐことによつて永遠の救いにあずかるのであります。本当に大きな喜びのおとずれであつて、それ以前のどんな賢者も学者も政治かも企て得なかつたことでありました。とりわけ、只今読みましたルカ傳の記事では登場人物は、羊飼い、貧しい大工の夫婦と、飼葉おけの中に眠る子でありまして、非常に素朴な庶民的な記事であります。これは王様や大臣の家に世嗣ぎが生まれたというような、いわば今日でいう新聞種になるような事件ではなくて、むしろ新聞記者などからは無視されるような、どこにでもある平凡な話に見えます。私は父ヨセフと母マリヤがベツレヘムの町で泊まる宿屋もなく、困り切った会話や、マリヤが産気づいて夫ヨセフが右往左往して宿のおかみにお手伝いを頼んだ様子などまで想像できるように思います。生れた赤ん坊を飼葉おけの中に寝せるなど、困り切った上での窮余の一策でしようが、こんなことも、宿屋のおかみか、女中さんぐらいがヨセフに教えてくれた庶民の智恵のように思えてならないのであります。要するに話は庶民にも親しみやすい素朴なお話であります。こういう風に生れられたイエスでありますから、私ども平凡なものが、自分の欠点や弱点などに失望し、悲しんでいるときでも、イエスはきつとわかつて下さるに違いないという安心が持たれます。

いわばイエス・キリストは天なる高い御座からくだって、わざわざ、ユダヤ人の庶民の中に生れられたわけであります。この徹底した謙ソンはイエス・キリストの魂の高さと貴さの証明であります。私ども夏、横川鉱泉においてピリピ書の勉強をいたしましたが、その中にこういう記事があります。

「キリストは神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事と思わず、かえつて、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」

私これをよみまして感じますことは、本当の王道というものはこういうものだということでした。イエス・キリストは人類の救世主でありますから、本来は王として人間に対していばつていても差支えないはずであります。しかしながら、よく考えてみますと、神さまが人間を救うためにこの世につかわされたものが、この世の王さまと同じようにいばつていたのでは、人間を救うことにはなりません。本当の救い主は、やはりイエスのように、貧しい家に生れ、平凡な生活、苦しいことも、困ったこともある平凡な生活もされ、神の道のためには誤解されて十字架にかかる、十字架にかかりながらも、敵に対してとりなしの祈りをされる。こういう徹底したケン虚さが真の救世主の条件、真の王道なのだと思います。飼葉桶の中に生まれた赤ん坊といえば、最低も最低、これより下がないように思われますが、実はここに深い神のみこころがあつたと思うのであります。人間は最低生活と

いえば嫌い、何としてでも条件のよい職場を探し、少しでもいい生活レベルを志すわけでありますけれども、神の目からすると、最低も最高もそう大して違つたものではありません。たとえイエスが飼葉桶の中に生れたまうても、神さまはイエスを見捨てられたわけではありません。飼葉桶のような、低い、低いところにも、神の愛と真実は行きとどいておりました。旧約聖書の中にありますように、神は天地に充ちるお方であります。飼葉桶の中に眠るみどり児の姿は信頼そのものであったろうと思います。神の子がその高き位をおりて、飼葉桶の中に下った、この事実は偉大であります。

またイエス・キリストを通じて、本当の平和が人類にやつてくるということ－これは私どもイエスを信ずるものの中心となる信念であります。昭和三一年十二月「嘉信」誌上に、矢内原先生のこういう言葉がのつております。

「イエス・キリストは神の経綸の中心として、救の恩恵を人に与えるために、栄光の天より降つて地に平和をもたらし給うた。彼によつて至高の天にある神の栄光は、低き地の馬槽の中に現われたのである。絶大の奇蹟である。最大の恩恵である。我らがクリスマスを祝するのは、この奇蹟に現れた神の栄光を讃美し、この恩恵によつて注がれる主の平和を感謝するためである。」

人間が人間と結んだ約束は破られることがあります。しかし神が人間に約束された恩恵は破れることはありません。人間同士が戦争をしないために、不可侵条約を結んでも、いつ破れるかわかりません。第二次世界大戦でドイツがソ連との間の不可侵条約を破つて戦争に突入し、ソ連が日本との間の不可侵条約を破つて参戦したことは多くの方が記憶されていると存じます。人間の約束はたよりないけれども、神の約束はゆるぎがありません。神はイエス・キリストによつて人間の罪をゆるし、人間の魂に平和を与えられるのであります。これは実に絶大な恩恵であります。ただ、人間の方で、それに気がつき、イエス・キリストを通じて、神に一言、お許し下さいといえばそれでよろしいのであります。神は本当に罪によつて失われた人の心の平和を回復したがつておられるのであります。一人の人の心に本当の平和が回復されるならば、その平和は、その人の周囲にある人の魂にも作用しないではいないはずです。個人と個人の間でもそうでありますが、この関係は国家と国家の間にも成立つべきものであります。国国の間に戦争のたえないこの世界にあつて、神からたまわつた本当の平和が、どんなに重要であるかを私は思います。第二次世界大戦のさなかで、どんなに多くの尊い生命が犠牲にされたかを思うとき、そして戦争のあとにもどつて来た平和の価値がどんなに尊とかつたかを思うとき、私は国々の指導者が、滅びの道を走ることをやめ、真にイエス・キリストに立ちかえつて、平和を求めることを切望いたします。

聖書という本はまことに不思議な本であります。大図書館の中に一冊置かれたならば、どこにあるか、探すのにも骨がおれる、そういう小さな本でありますけれども、この聖書が人類に与えた影響の大きさを考えるとまつたく不思議という外ありません。聖書のうちでも、イエス・キリストの生涯を記した福音書は不思議であります。イエスの人物はまつたくそれ自体奇蹟というほかありません。たつた三年間ほど、ちつぽけなユダヤの国で神の道を説かれたこの人でありますが、その教えは二千たつても亡びるどころか、反対に全世界にひろまつて行つたのであります。これは奇蹟という外ありません。イエスの御生涯のうちでも誕生についての記事は、私どものうちに強いインスピレーションを呼び起こすのであります。「万民にかかわりたる喜ばしきおとずれ」「天には栄光、地に平和」これ

こそ人間の理想でなくして何でありましよう。大事なことはこれらの精神が、たんに人間的に考えられたのではなく、神から賜つたということであります。実に絶大な恩恵というべきでしよう。地上においては私どもの肉体が不完全であるように、私どもの住む社会また不完全であります。私ども一人一人が、イエス・キリストによつて魂に本当の平和を回復し、神によつて立てられた大理想を、この世にもうち立ててゆくよう努めることは、大それた望みでしようか。人間的に言えばそれは大それたことであります。しかし前にも申しましたように、神の愚かは人よりも賢いこともまた本当であります。私どもは忍耐をもつて神のみ心にそい奉るの決意を今日もまた新にせねばならないと存じます。

もう一つイエスの生涯から受ける大きな教訓をあげてみたいと存じます。イエスはその生涯において多くの奇蹟を行いたまいました。科学的には不思議に見えますが、どうしてもつくり事とは思われない迫真性に富んだ奇蹟の記事があります。イエスの奇蹟はイエスの偉大な能力のあらわれです。ところがイエス御自身はそういう偉大な力をもたれたにもかかわらず、人にみせびらかすためにそれを使われませんでした。また、別の面ではひどく平凡でありました。ユダヤの貴族、王族とつき合うでもなく、ふだん相手にされたのは、片田舎ガリラヤの漁師や農夫でありました。つまりイエスはこの世の小さき兄弟姉妹たちに対して真実でありたまいました。イエスの偉大は、この世の偉大とことなつて、本当に目立たない、小さいところからはじまつたのだということができます。真実にして平凡なるは、この世の絶大にまさること数等であると私は思います。このように真実にして平凡な、真実にしていたずらに奇をこのみたまわないイエスの人格の高さ、－イエスは本当に神によつて立てられた人類の師表であると思うのです。

そこでいま私どもの置かれている立場をふりかえってみましよう。私どもは水戸、あるいは水戸周辺の地にあつてイエスを証しするものとして立てられております。私どもは教会という組織によつてこのようなことをするのではなく、まつたく自由に、イエスの霊に迫られて集会をおこない、イエスのみ名をあがめ、神の国のために祈つております。私どもの中にとくに大学者、大先生がおられるというわけではありません。私ども一人一人はまつたく平凡な平信徒であります。そういう者の集りであるこの集会は、前に半田さんがおつしやいましたように「吹けば飛ぶような」集会であるかも知れません。それにもかかわらず、私は信じます。水戸無教会グループは水戸の救いのために立てられた一つの角なのだと。そして水戸無教会グループは、地方無教会運動のさきがけの一つとして日本の救いのために必ず何かの役割を果すであろうと。水戸の救い、日本の救い、私どもの兄弟姉妹、わたくしどもの同胞の救い、大ゲサなことを言うようですが、私どもはやはり神さまからそういう使命をさずかつて、この地に立つているのではないでしようか。自分のまわりの小さな兄弟姉妹を愛することのできぬものにキリストの愛を語る資格はありません。自分をはぐくんでくれた郷土を愛することのできぬものに真の道義はありません。そういう人々にわたくしどもは望みをつなぐことはできません。イエス・キリストは一見平凡のうちにまつたき徳、まつたき道義を実現されたのであります。私どもこの師に及ばざることは勿論でありますが、私どもも平凡であってよろしい。われらの平凡をもつて、イエス・キリストの証となし、水戸の救い、日本の救いたらしめたいものと存じます。多分、これは日本のみの問題ではなく全世界の問題ともなろうと存じます。私どもは弱くても、神が強いことを信じ抜きたいものと存じます。

最後に内村鑑三先生の文章によつて、このつたなき講演を終りたいと存じます。

「神は実行家なり。彼は思想家にあらず、彼は天上の高きに坐して、彼の造りし宇宙の美をながめて独り感歎にふけり給わず神は感情家にあらず、彼は天堂の聖きにいまして人類の罪悪に沈むを見て独り涙にむせび給わず、神は実行家なり。彼は彼の独り子を世におくりて、彼の造りし宇宙と人類とを罪の呪詛より救い給えり。クリスマスは神愛実行の記念日なり。よくこの日を守らんと欲する者は、神にならうて愛を実行せざるべからず。」